

問うて云はく、末代<sup>あくせ</sup>悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。答へて云はく、法華經の題目を以て本尊とすべし。問うて云はく、何れの經文、何れの人師の釈にか出でたるや。答へて云はく、法華經の第四法師品に云はく「藥王、在々処々に若しは説き若しは読み、若しは誦<sup>じゆ</sup>し若しは書き、若しは經卷所住の処には皆<sup>まさ</sup>応に七宝の塔<sup>た</sup>を起て、極めて高広嚴飾ならしむべし。復舍利を安んずることを須<sup>もち</sup>ひず。所以は何。此の中には已に如来の全身<sup>ましま</sup>有す」等云云。涅槃經の第四如来性品に云はく「復次に迦葉、諸仏の師とする所<sup>いわゆる</sup>は所謂法也。是の故に如来恭敬<sup>くぎよう</sup>供養す。法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」云云。天台大師の法華三昧に云はく「道場の中に於て好き高座を敷き、法華經一部を安置し、亦必ずしも形像舍利並びに余の經典を安んずべからず。唯法華經一部を置け」等云云。

疑<sup>ま</sup>つて云はく、天台大師の摩訶止觀の第二、四種三昧の御本尊は阿彌陀仏なり、不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は釈迦・多宝を以て法華經の本尊とせり、汝何ぞ此等の義に相違するや。答へて云はく、是<sup>これ</sup>私の義にあらず。上に出だすところの經文並びに天台大師の御釈なり。但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は阿彌陀仏とは、彼は常坐・常行・非行非坐の三種の本尊は阿彌陀仏なり。文殊問經・般舟三昧經・請觀音經等による。是は爾前の諸經の内未顯真實の經なり。半行半坐三昧には二あり。一には方等經の七仏・八菩薩等を本尊とす、彼の經による。二には法華經の釈迦・多宝等を引き奉れども、法華三昧を以て案ずるに法華經を本尊とすべし。不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり。此は法華經の教主を本尊とす、法華經の正意にはあらず。上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊、法華經の行者の正意なり。

問うて云はく、日本国に十宗あり。所謂<sup>いわゆる</sup>俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・淨土・禪・法華宗なり。此の宗は皆本尊まちまちなり。所謂<sup>ほつそう</sup>俱舍・成実・律の三宗は劣<sup>る</sup>應身の小釈迦なり。法相・三論の二宗は大釈迦仏を本尊とす。華嚴宗は台上の盧遮那<sup>るしゃな</sup>報身<sup>ほうしん</sup>の釈迦如来、真言宗は大日如来、淨土宗は阿彌陀仏、禪宗にも釈迦を用ひたり。何ぞ天台宗に法華經を本尊とするや。答ふ、彼等は仏を本尊とするに是は經を本尊とす、其の義あるべし。問ふ、其の義如何。仏と經と何れか勝れたるや。答へて云はく、本尊とは勝れたるを用ふべし。例せば儒家には三皇五帝を用ひて本尊とするが如く、仏家にも又釈迦を以て本尊とすべし。

問うて云はく、然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして、法華經の題目を本尊とするや。答ふ、上に挙ぐるところの經釈を見給へ、私の<sup>い</sup>ぎにはあらず。釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり。末代今の日蓮も仏と天台との如く、法華經を以て本尊とするなり。其の故は法華經は釈尊の父母、諸仏の眼目なり。釈迦・大日總じて十方の諸仏は

法華經より出生し給へり。故に全く能生を以て本尊とするなり。問ふ、其の証<sup>しょうこ</sup> 擲如何。答ふ、普賢經に云はく「此の大乗經典は諸仏の宝蔵也、十方三世の諸仏の眼目なり、三世の諸の如来を出生する種なり」等云云。又云はく「此の方等經<sup>これ</sup>は是諸仏の眼なり。諸仏は是に因って五眼を具することを得たまへり。仏の三種の身は方等より生ず。是大法印にして涅槃海<sup>ねはんかい</sup>を印す。此くの如き海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。此の三種の身は人天の福田<sup>ふくでん</sup>、応供の中の最なり」等云云。此等の經文、仏は所生、法華經は能生、仏は身なり、法華經は神<sup>たましい</sup>なり。然れば則ち木像画像の開眼供養は唯法華經にかざるべし。而るに今木画の二像をまうけて、大日仏眼の印と真言とを以て開眼供養をなすは、尤<sup>もつと</sup>も逆なり。

問うて云はく、法華經を本尊とすると、大日如来を本尊とすると、いづれか勝るや。答ふ、弘法大師・慈覺大師・智証大師の御義の如くならば、大日如来は勝れ、法華經は劣るなり。問ふ、其の義如何。答ふ、弘法大師の秘蔵宝鑰・十住心に云はく「第八法華、第九華嚴、第十大日經」等云云。是は浅きより深きに入る。慈覺大師の金剛頂經<sup>こんごうちょう</sup>の疏・蘇悉地經<sup>そしつじ</sup>の疏・智証大師の大日經の旨歸等に云はく「大日經第一、法華經第二」等云云。問ふ、汝が意如何。答ふ、釈迦如来・多宝仏総じて十方の諸仏の御評定に云はく「已今当の一切經の中に法華最も為れ第一なり」云云。問ふ、今日本国中の天台・真言等の諸僧並びに王臣万民疑って云はく、日蓮法師めは弘法・慈覺・智証大師等に勝るべきか如何。答ふ、日蓮反詰して云はく、弘法・慈覺・智証大師等は釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか是<sup>一</sup>。今日本国王より民まで教主釈尊の御子なり。釈尊最後の御遺言に云はく「法に依って人に依らざれ」等云云。法華最第一と申すは法に依るなり。然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ諸僧・王臣・万民・乃至所從・牛馬等に至るまで不孝の子にあらずや是<sup>二</sup>。問ふ、弘法大師は法華經を見給はずや。答ふ、弘法大師一切經を読み給へり。其の中に法華經・華嚴經・大日經の浅深勝劣を読み給ふに、法華經を読み給ふ様に云はく「文殊師利此の法華經は諸仏如来秘密の蔵也。諸經の中に於て最も其の下に在り」と。又読み給ふ様に云はく「藥王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり、而も此の經の中に於て法華最第三」云云。又慈覺・智証大師の読み給ふ様に云はく「諸經の中に於て最も其の中に在り」と。又「最も為れ第二」等云云。釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏、法華經を一切經に相對して説いての給はく「法華最第一」と。又説いて云はく「法華最も其の上に在り」云云。所詮釈迦・十方の諸仏と慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや。但し事を日蓮によせて釈迦・十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。

問ふ、弘法大師は讚岐国の人、勤操僧<sup>ごんそうそうじょう</sup> 正の弟子なり。三論・法相の六宗を極む。去ぬる延暦廿三年五月、桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入る。順宗皇帝<sup>じゆんそう</sup>の勅に依りて青竜寺に入りて、惠果和尚に真言の大法を相承<sup>そうじょう</sup>し給へり。惠果和尚は大日如来よりは七代になり給ふ。人はかはれども法門はをなじ。譬へば瓶の水を猶瓶<sup>なほ</sup>にうつすがごとし。

大日如来と金剛薩埵・竜猛・竜智・金剛智・不空・惠果・弘法との瓶は異なれども、  
所伝の智水は同じ真言なり。此の大師彼の真言を習ひて、三千の波濤をわたりて日本国  
に付き給ふに、平城・嵯峨・淳和の三帝にさづけ奉る。去ぬる弘仁十四年正月十九日  
に東寺を建立すべき勅を給ひて、真言の秘法を弘通し給ふ。然れば五畿七道、六十六箇  
国二つの島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。

又慈覚大師は下野国の人、広智菩薩の弟子なり。大同三年御歳十五にして伝教大師  
の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間、六宗を習ひ、法華・真言の二宗を習ひ伝へ、  
承和五年御入唐、漢土の会昌天子の御宇なり。法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠  
等の天台・真言の碩学に値ひ奉りて、顕密の二道を習ひ極め給ふ。其の上殊に真言の秘  
教は十年の間、功を尽くし給ふ。大日如来よりは九代なり。嘉祥元年仁明天皇の御師  
なり。仁寿・斉衡に金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り、叡山に総持院を建立して、  
第三の座主となり給ふ。天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐国の人、天長四年御年十四、叡山に登り、義真和尚の御弟子となり  
給ふ。日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習ひ伝へ、去ぬる仁寿  
元年に文徳天皇の勅を給ひて漢土に入り、宣宗皇帝大中年中に法全・良諲和尚等の諸  
大師に七年の間、顕密の二教を習ひ極め給ひて、去ぬる天安二年に御帰朝、文徳・清和  
等の皇帝の御師なり。何れも現の為当の為、月の如く日の如く、代々の明主・時々  
の臣民信仰余り有り、帰依怠り無し。故に愚癡の一切、偏に信ずるばかりなり。誠  
に依法不依人の金言を背かざるの外は争でか仏に依らずして弘法等の人に依るべき  
や。所詮其の心如何。答ふ、夫教主釈尊の御入滅一千年の間、月氏に仏法の弘通せし  
次第は、先五百年は小乗、後五百年は大乗、小大・権実の争ひはありしかども顕密の  
定めはかすかなりき。像法に入りて十五年と申せしに漢土に仏法渡る。始めは儒道  
と釈教と争論して定めがたかりき。されども仏法やうやく弘通せしかば小大・権  
実の争論いできたる。されどもいたくの相違もなかりしに、漢土に仏法わたりて  
六百年、玄宗皇帝の御宇に善無畏・金剛智・不空の三三蔵、月氏より入り給ひて  
後、真言宗を立てしかば、華嚴・法華等の諸宗は以ての外にくだされき。上一人  
より下万民に至るまで真言には法華経は雲泥なりと思ひしなり。其の後徳宗皇帝  
の御宇に妙楽大師と申す人、真言は法華経にあながちにをとりたりとおぼしめし  
しかども、いたく立つる事もなかりしかば、法華・真言の勝劣を弁へる人なし。

日本国は人王三十代欽明の御時、百済国より仏法始めて渡りたりしかども、始めは神  
と仏との争論こわくして三十余年はすぎにき。三十四代推古天皇の御宇に聖徳太子  
始めて仏法を弘通し給ふ。慧観・観勒の二の上人、百済国よりわたりて三論宗を  
弘め、孝徳の御宇に道昭、禅宗をわたす。天武の御宇に新羅国の智鳳、法相宗を  
わたす。第四十四代元正天皇の御宇に善無畏三蔵、大日経を渡す。然而弘まらず。  
聖武の御宇に審祥大徳・朗弁僧正等、華嚴宗を渡す。人王四十六代孝謙天皇の御  
宇に唐代の鑑真和尚、律

宗と法華宗をわたす。律をばひろめ、法華をば弘めず。第五十代桓武天皇の御宇に延暦廿三年七月、伝教大師勅を給ひて漢土にわたり、妙楽大師の御弟子道邃・行満に値ひ奉りて法華宗の定慧を伝へ、道宣律師に菩薩戒を伝へ、順暁和尚と申せし人に真言の秘教を習ひ伝へて、日本国に帰り給ひて、真言・法華の勝劣は漢土の師のおしへに依りては定め難しと思し食しければ、こゝにして大日経と法華経と、彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ給ひしに、大日経は法華に劣りたるのみならず、大日経の疏は天台の心をとりにて我が宗に入れたりけりと勘へ給へり。

其の後、弘法大師真言経を下されける事を遺恨とや思し食しけむ。真言宗を立てんとたばかりて、法華経は大日経に劣るのみならず華嚴経に劣れりと云云。あはれ慈覚・智証、叡山・園城にこの義をゆるさずば、弘法大師の僻見は日本国にひろまるまじきに、彼の両大師華嚴・法華の勝劣をばゆるさねども、法華・真言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば、存外に本師伝教大師の大怨敵となる。其の後日本国の諸の碩徳等各智慧高く有るなれども、彼の三大師にこえざれば、今に四百余年の間、日本一同に真言は法華経に勝れけりと定め畢んぬ。たまたま天台宗を習へる人々も真言は法華に及ばざるの由存すれども、天台座主・御室等の高貴におそれて申す事なし。あるは又其の義をもわきまへぬかのゆへに、からくして同の義をいへば、一向真言師はさる事おもひもよらずとわらふなり。

然れば日本国中に数十万の寺社あり。皆真言宗なり。たまたま法華宗を並ぶとも真言は主の如く法華は所従なり。若しは兼学の人も心中は一同に真言なり。座主・長吏・検校・別当、一向に真言たるうへ、上に好むところ下皆したがふ事なれば一人ももれず真言師なり。されば日本国、或は口には法華最第一とはよめども、心は最第二・最第三なり。或は身口意共に最第二・三なり。三業相應して最第一と読める法華経の行者は四百余年が間一人もなし。まして能持此経の行者はあるべしともおぼへず。「如来現在猶多怨嫉・況滅度後」の衆生は上一人より下万人にいたるまで法華経の大怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内、第十二に相当たる安房国長狭郡東条郷片海の海人が子なり。生年十二、同じき郷の内清澄寺と申す山にまかりのぼりて、遠国なるうへ、寺とはなづけて候へども修学の人なし。然而随分諸国を修行して学問し候ひしほどに我が身は不肖なり。人はおしへず、十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たまたま仏・菩薩に祈請して、一切の経論を勘へて十宗に合はせたるに、俱舍宗は浅近なれども一分は小乗経に相当するに似たり。成実宗は大小兼雑して謬誤あり。律宗は本は小乗、中比は大乘、今は一向に大乘宗とおもへり。又伝教大師の律宗あり、別に習ふ事なり。法相宗は源権大乘経のなかの浅近の法門にてありけるが、次第に増長して権実と並び結句は彼の宗々を打ち破らんと存ぜり。譬へば日本国の將軍將門・純友等の如し。下に居して上を破す。三論宗も又権大乘の空の一分なり。此も我は実大乘とおもへ

り。華嚴宗は又権大乘と云ひながら余宗にまされり。譬へば摂政関白のごとし。然而法華經を敵となして立つる宗なる故に、臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごとし。浄土宗と申すも権大乘の一分なれども、善導・法然がたばかりかしこくして、諸經をば上げ觀經をば下し、正像の機をば上げ末法の機をば下して、末法の機に相叶へる念仏を取り出だして、機を以て經を打ち、一代の聖教を失ひて念仏の一門を立てたり。譬へば心かしこくして身は卑しき者が、身上げて心はかなきものを敬ひて賢人をうしなふがごとし。禅宗と申すは一代聖教の外に真実の法有りと云云。譬へば親を殺して子を用ひ、主を殺せる所従のしかも其の位につけるがごとし。真言宗と申すは一向に大妄語にて候が、深く其の根源をかくして候へば浅機の人あらはしがたし。一向に誑惑せられて数年を経て候。先づ天竺に真言宗と申す宗なし。然るにありと云云。其の証拠を尋ぬべきなり。所詮大日經こゝにわたれり。法華經に引き向かへて其の勝劣を見るの処に、大日經は法華經より七重下劣の經なり。証拠は彼の經此の經に分明なり。此に之を引かず。しかるを或は云はく、法華經に三重の主君、或は二重の主君なりと云云。以ての外の僻見なり。譬へば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ、超高が民の身として横に帝位につきしがごとし。又彼の天竺の大慢婆羅門が釈尊を床として坐せしがごとし。漢土にもしる人なく、日本にもあやめずして、すでに四百余年をおくれり。

是くの如く仏法の邪正乱れしかば王法も漸くつきぬ。結句は此の国他国にやぶられて亡国となるべきなり。此の事日蓮独り勘へ知れる故に、仏法のため王法のため、諸經の要文を集めて一卷の書をつくる。仍って故最明寺入道殿に奉る。立正安国論と名づけき。其の書にくはしく申したれども愚人は知りがたし。所詮現証を引いて申すべし。

人王八十二代隱岐法王と申す王有しき。去ぬる承久三年<sup>本曆</sup>五月十五日、伊賀太郎判官光末を打ち捕りまします。鎌倉の義時をうち給はんとてのかどでなり。やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の権大夫義時を打ち給はむとし給ふところに、かへりて義時にまけ給ひぬ。結句我が身は隱岐国にながされ、太子二人は佐渡国、阿波国にながされ給ふ。公・七人は忽ちにくびをはねられてき。これはいかにしてまけ給ひけるぞ。国王の身として、民の如くなる義時を打ち給はんは鷹の雉をとり、猫の鼠を食むにてこそ有るべきに、これはねこのねずみにくらはれ、鷹の雉にとられたるやうなり。しかのみならず調伏の力を尽くせり。所謂天台の座主慈円僧正、真言の長者仁和寺の御室、園城寺の長吏、総じて七大寺十五大寺、智慧戒行は日月の如く、秘法は弘法・慈覚等の三大師の心中の深密の大法・十五壇の秘法なり。五月十九日より六月の十四日にいたるまで、あせをながし、なづきをくだきて行なひき。最後には御室、紫宸殿にして日本国にわたりていまだ三度までも行なはぬ大法、六月八日始めて之を行なふ程に、同じき十四日に關東の兵軍、宇治勢多をおしわたして、洛陽に打ち入りて三院を生け取り奉り、九重に火を放ちて一時に焼失す、三院をば三国へ流罪し奉りぬ。又公・七人は忽ちに頸

をきる。しかのみならず御室の御所に押し入りて、最愛の弟子のせい た か小兒勢多伽と申せしをせめいだして、終に頸をきりにき。御室堪へずして思い死に給ひおわ畢んぬ。母も死す、わらべ童も死す。すべて此のいのりをたのみし人、いくせんばむといふ事をしらず死ににき。たまたまいきたるもかひなし。御室祈りを始め給ひし六月八日より同じき十四日まで、なかをかぞふれば七日に満じける日なり。此の十五壇の法と申すは一字こんりん金輪・四天王・不動・大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼・六字・金剛童子・尊星王・太元・守護経等の大法なり。此の法の詮は国敵・王敵となる者を降伏して、命を召し取りて其の魂を密厳浄土へつかはすと云ふ法なり。其の行者の人々も又軽からず、天台の座主慈円・東寺・御室・三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云。法と云ひ行者と云ひ、又代も上代なり。いかにとしてまけ給ひけるぞ。たとひかつ事こそなくとも、即時にまけおはりてかゝるはぢにあひたりけること、いかなるゆへといふ事を余人いまだしらず。国主として民を討たん事、鷹の鳥をとらんがごとし。たとひまけ給ふとも、一年二年十年二十年もさゝうべきぞかし。五月十五日におこりて六月十四日にまけ給ひぬ。わづかに三十余日なり。ごんの権大夫殿は此の事を兼ねてしらねば祈禱もなし、かまへもなし。

然而日蓮小智を以てしかるに勘へたるに其の故あり。いはゆるかの真言の邪法の故なり。僻事は一人なれども万国の煩わづらひなり。一人して行ずとも一国二国やぶれぬべし。況んや三百余人をや。国主とともに法華経の大怨敵となりぬ。いかでかほろびざらん。かゝる大悪法としをへて、やうやく関東におち下りて、諸堂の別当・供僧となり連々と行なへり。本より辺域の武士なれば教法の邪正をばしらず。ただ三宝をばあがむべき事とばかり思ふゆへに、自然としてこれを用ひきたりてやうやく年数を経るほどに、今他国のせめをかうむてこの国すでにほろびなんとす。関東八箇国のみならず、叡山・東寺・園城・七寺等の座主・別当、皆関東の御はからひとなりぬるゆへに、おきのほうおう隠岐法皇のごとく、大悪法の檀那と成り定まり給ひぬるなり。国主となることは大小皆梵王・帝釈・日月・四天の御計らひなり。法華経の怨敵となり給はたちまゞ忽ち治罰すべきよしを誓ひ給へり。随って人王八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して、兵衛佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め、山王を氏神とたのみしかども、安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺さる。一門皆一時にほろび畢んぬ。第二度なり。今度は第三度にあたるなり。日蓮がいさめを御用ひなくて、真言の悪法を以て大蒙古国を調伏せられれば、日本還って調伏せられなん。げんじゃく おほんにん還著於本人と説けりと申すなり。然らば則ち罰を以て利生を思ふに、法華経にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり。現世の祈禱は、兵衛佐殿経を誦する現証なり。

この道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば、父母はずでに過去し給ひ畢んぬ。故道善御房は師匠にておはしまししかども、法華経の故に地頭におそれ給ひて、心中には不便とおぼしつらめども、外にはかたきのやうににくみ給ひぬ。のちにはすこし信じ

給ひたるやうにきこへしかども、臨終にはいかにやおはしけむ、おぼつかなし。地獄まではよもおはせじ。又生死をはなるゝ事はあるべしとおぼへず。中有にやたゞよひましますらむとなげかし。貴辺は地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺をいでておはせし人なれば、何となくともこれを法華經の御奉公とおぼしめして、生死をはなれさせ給ふべし。

此の御本尊は世尊説きおかせ給ひてのち、二千二百三十余年が間、一閻浮提の内におはす。漢土の天台・日本の伝教はほゞしらしめして、いさゝかもひろめさせ給はず。当時こそひろまらせ給ふべき時にあたりて候へ。經には上行・無辺行等こそいでてひろめさせ給ふべしと見えて候へども、いまだ見えさせ給はず。日蓮は其の人には候はねどもほゞ心得て候へば、地涌の菩薩のいでさせ給ふまでの口ずさみに、あらあら申して況滅度後のほこさきに当たり候なり。願はくは此の功德を以て父母と師匠と一切衆生に回向し奉らんと祈請仕り候。其の旨をしらせまいらせむがために御本尊を書きをくりまいらせ候に、他事をすてゝ此の御本尊の御前にして一向に後世をものらせ給ひ候へ。又これへ申さんと存じ候。いかに御房たちはからい申させ給へ。